

国士館の思い出

音楽に燃え、仲間に支えられた四年間

文学部教育学科初等教育専攻卒業（昭和五一年三月卒・文学部七期生）

館 正史



はじめに

一九七二（昭和四七）年四月、私は北海道から上京して国士館大学に入學しました。

私が、本校を選んだ理由は三つでした。

一つ目は、父が教師であり、その生き方に強い感銘を受け、自分も父の様な小学校教師になりたいと願ったからです。進学雑誌に「国士館大学の就職率や採用率は百パーセントに近い」と載っているのを見て「こしかな」と決めたのでした。また、「一生に一度は、東京で暮らしてみたい」と思っていたことも後押しとなりました。

二つ目は、高校時代の地理の先生が、厳しさと礼節を

重んじ、情熱を持って授業や部活のサッカーに打ち込む姿に感動し、その先生を尊敬していたためです。後から先生の出身校が国士館大学であると聞き、私も国士館大学の校風に強く共感しました。

三つ目は、当時の社会状況にあります。この頃は「学生運動」がまだ盛んな時期で、混沌とした雰囲気でした。勉学もままならないばかりか、命さえ脅かす社会ではないかと日々思っており、高校時代、卒業した先輩が警視庁の警察官として勤務していたこともあり、私は、その後に続くべきか、それとも教師になるべきか決めかねていたなかで、警察官採用試験を受け『合格・採用巡査に命ず』の通知が警視庁より届きました。教師になるべきか・警察官になって治安を正すべきか大いに悩



歌う筆者
(中央、『文学部卒業アルバム』1976年3月)

みましたが、国士館の校風と人づくりに強く惹かれ、この大学を卒業して、明るい未来を築いていく児童を育てる仕事の方が私に向いていると判断し、進学の道を選択しました。

今思えば、国士館大学で学び、そこで経験したことや学んだことを基に「教職の道」を歩んだことは、私にとって正しい選択であったと思います。

今、六九歳となった私が、大学四年間を振り返ってみると、東京の都会での楽しさと反面苦しさ、お金のない

時のみじめさ、梅雨から夏にかけての蒸し暑さを体感したこと、これらを通して親のありがたさを実感したことが強く印象に残っています。さらに、初等教育専攻の個性溢れる沢山の先輩や友人達に、また初等教育専攻を超えた音楽研究会の仲間達にも出会え、彼らの支えがあつて卒業出来たことも思い出されます。

他にも、柴田徳次郎先生の大講堂での訓話、諸先生方の情熱溢れる教え、柳楽吉郎学生監を始め学生課の先生方の励ましと助言、テノール歌手でもあつた奥田良三先生（非常勤講師）の学生の心を見抜いた的確な独唱指導、声楽の宋鳳悦先生（非常勤講師）が手掛けた素晴らしい初等教育の歌、などです。また、一週間に一度の神辺八重子先生（非常勤講師）のピアノレッスンでは指が震え、頭は真っ白になる程の厳しい指導、その裏には学生を一人でも一人前に育てようとする熱意を感じました。一方、部活動では音楽研究会に入部し、混声四部合唱団の先輩や後輩のなかで調和する楽しさ、リーダーとして様々な困難に直面し悩んでいた時に、私に寄り添って温かい手を差し伸べてくれた先生方と先輩や級友のことを思い出すと今でも胸が熱くなります。

私は、一九七六（昭和五一）年三月二〇日、一〇号館最上階の講堂（剣道場）において総長柴田梵天先生から卒業証書を授かるまで、大学生活の四年間でこれからの人生を生きていくための基礎を養うことができました。

教職（再任用も含め）の道を退いて、今年で四年目。この間、様々な病気（肺炎・心筋梗塞等）で入退院を繰り返す現在、死ぬ前に一度、世田谷本校を見学して「あの時食べた、八号館地下一階の学食のカレーをもう一度食べてみたい」と思い、今年の三月に妻を同伴し懐かしく食しました。あの頃食べた味とは違いましたが、格別な思い出深い味でした。

校内には懐かしい大講堂も現存しておりました。また突き当りの正面校舎の上には、正座をして総長先生の訓話を聞いた講堂（一〇号館・剣道場）があり、当時の思い出が蘇ってきました。左横には主に初等科や短大の講義、中学校の授業で使っていた校舎も残っていました。ただ、校舎を囲むような塀はなく、正門も当時とは違った現代的な造りとなっており、時代の変化に合わせた造りに驚きました。

私が在学していた時になかった、「国士館史資料室」

に寄った際、担当者の方から学生時代の思い出を書いて頂きたい旨の話がありました。近頃は、年齢とともに記憶が薄れていくこともあり、なんとか心に残っていることを、掘り起こして書くことができたと願って筆を執った次第です。

東京での学生生活

思い出その一〜五

思い出の一つは、入学直後に受けた強烈な印象でした。国士館大学の「文武両道」の気風を育むため「武道」が必修であったこと、加えて入学式後にグラウンドでの分列行進が行われたことに驚いたことです。

特に、分列行進では、式台上の総長先生への「頭右！」などの号令に、身が引き締まるとともに、「捧げ杖」「立て杖」などの号令に同調する快感が身体中に走りました。同時に心の中で「これが国士館大学なんだ」と強く感じた次第です。

大学の授業では「学生監」と呼ばれる教務課職員（私たちの担当は古莊武雄先生・柳楽吉郎先生）が、主に授業開始前に出席票を配り回収していました。毎回、出

席票（氏名・学生番号を記入）を提出することで、授業を確実に受けている証になります。私の友人は、出席票の代筆を頼む人は一人もおらず、皆、誠実で真面目に講義を受ける良き学友でした。ただ日々の校内で、長ラ



第3回初等教育運動会
（左上・筆者、『文学部卒業アルバム』1976年3月）

ンを着た運動部や応援団の学生が、大きな声で「オッス、オッス」と挨拶するのは当初身がすぐむ思いがしたものでした。

思い出のその二は、東京人になった喜びです。

確か当時、一・二年生は、小田急線鶴川駅の鶴川分校で基礎的学習内容を習得し、三・四年生は世田谷本校で学習することになっていたと記憶しています。私は当初、鶴川分校に通うことを考えて、鶴川分校の学生課の柳楽吉郎学生監をはじめ様々な方からの紹介があり、そのなかから住む場所を決めました。鶴川分校には寮もあったのですが、高校時代にあまり良い印象がなかったため自炊アパートに決めた次第です。

場所は町田市金井町笹子でした。アパートの周辺は夏には蛙が鳴く田んぼがあり、棟は笹藪に囲まれていました。数棟ある長屋アパートの四畳半の部屋（共同台所、共同トイレ）に居を構えました。鶴川分校の登下校は、「笹子」のバス停から神奈川中央バスで鶴川駅まで行き、鶴川駅前からは小田急バス乗り換えて鶴川団地をとおって通いました。下校時は気の合った友人数名と徒歩で駅まで行くのですが、時々途中で、馴染みの喫茶店に寄り、

学校のことや音楽論を戦わせておりました。そこで、飲み物を注文する時「アイコ一つ」「レスカ二つ」等、この言葉を使うたびに東京人になったような気持ちになりました。

また、鶴川分校のサッカーグラウンドにおいて、日中、テレビ番組の青春ドラマ「飛び出せ！青春」の撮影収録がありました。主演の村野武範や酒井和歌子などの俳優が世田谷本校内やグラウンドで撮影している光景が、四階の教室から丸見えで、つい見入ってしまい授業どころではなかった時もありました。このことからここが東京であることを実感したものでした。

思いつきの三は、自炊したことによりお金の大切さを知り、計画的に使うことを学んだことでした。

月末になると仕送りのお金も底を突き、お金がない時には登下校は全て徒歩となり、友達が誘う喫茶店通いも、理由をつけてアパートに帰らなければならなかったもので、仕送りが待ち遠しかった思い出があります。

本当に財布の中に数十円しかない時、路上に落ちているセロファンに包まれたお菓子を拾って食べたこともあります。また、空腹で窓の前になっっている渋柿をたべ

て飢えを凌いだものでした。時には一週間食べない時もあり、耐えられないほど嫌いな豚バラ肉が冷凍庫の奥にあったことを思い出し、焼いて食べた時には「こんなに美味かったのか」と驚くと共に、「人間一週間ぐらい食べずとも、水さえあれば生きていけるものだ」と実感したものでした。ガスを数分使うにもお金、駅のトイレを利用するにもお金が必要であり、お金が無ければ生活できないことに気づかせてくれたのも、自分の金銭に対しての計画性の欠如を思い知らされたのも東京での生活を経験したからでした。

思いつきの四つ目は、夏の蒸し暑さと冬の柔道です。

大学は勿論、家にもクーラー等はないため、夏の日中の蒸し暑さを凌ぐためには喫茶店やパチンコ屋に逃げ込み時間を潰すことでした。幸いにもアパートの部屋は、周りが孟宗竹林で風も適度に吹き抜ける良環境でしたので、夜は窓を全開にして寝ることが出来ました。また笹林が幸いして蚊の苦労はありませんでした。

冬の寒さは北海道出身の私ですから堪えられましたが、柔道場での、新年の寒稽古の畳の冷たさは、堪えがたいものでした。身体が温まるまでが特に辛く、受け身

の際、手で畳を強く叩いて衝撃を逃がすのですが、その時の手のしびれと痛さは、今でも身体が覚えています。指導してくださったのは斉藤先生でした。

思い出の五つ目は、学業とアルバイトの両立の難しさでした。

親の経済的負担を減らすため奨学金を受給しつつ、日中は授業を受け、夜勤のアルバイトをすることにしました。アルバイトは、相模原にある某パン工場での食パンの製造を行いました。

定められた場所に立っているとパン工場の送迎用バスが来ます。夜九時に工場の二階の仮眠室で寝て、午前零時に従業員が起こしに来るまで仮眠をとります。起こされた後、すぐに下の作業所のベルトコンベアー相手に仕事に取り掛かります。疲れていてもベルトコンベアーは自分の疲れた身体に関係なく一定の速さでパン種が来ます。トイレに行きたい場合は、何倍もの速さで仕事をこなし、パン種がしばらく来ないような隙間の中で、走ってトイレに駆け込み、用をたしました。

このような生活を続けているある日、授業中に疲労から寝込んでしまうことが度々あり、「これではいけない」

と気持ち、このようなことがひと月続くことを考え、勉強とアルバイトの両立は無理であると判断し、一か月間だけになりました。「何のために大学に入ったのか、何が一番大切なのか」を考えて決めました。アルバイトを本業のようにして単位を落とし、大学を去って行った学友のことを時々ふと「彼は、今はどうしているんだろう」と思うことがあります。

「音楽」に燃えて

思い出その六、七

思い出の六つ目は、音楽に熱中した四年間と自分の性格を変えること（現状からの脱皮）が出来た体験です。

私は、高校時代「男声四部合唱団」を三年間続けてきました。鶴川分校に入り、田代先輩や寺田悟先輩方に誘われ『音楽研究会』へ入部しました。

当初は男女一四名から出発し、後に二四名に増えました。混声四部合唱団で、顧問は確か大島先生であったと思います。部員は全国各地から集まった仲間で、教室で合唱の練習をして、大学祭や初等教育専攻の定期演奏会での発表を目標に日々練習に励み、様々な町（石川県羽

昨市、伊豆大島、長野県白樺湖等）で合宿したりコンパをしたりして心を繋いでいきました。

合唱団のメンバーを列記すると、初代部長の田代先輩のほか寺田悟先輩・平先輩・若林先輩らの諸先輩方、同



音楽研究発表会
(『文学部卒業アルバム』1976年3月)

学年や下級生には、大竹淡紅子・中村悦美・石井よしの・山岸幸美・畠山美津子・大賀淑子・林けい子・森由美子・長沢多津子・福地優子・長谷川洋子・田代知子・内田紀子・高見庸子・岩田幸子・小林まゆみ・松井伊津美・遠藤孝典・田沼孝・城所正年・森合智昭・馬場宏一・鎌田光三の各氏で、お互いに高めあってきました（敬称略）。現在でもその当時の学友が目につかびます。

初代部長田代先輩の卒業前となり、次の二代目部長が選出されることになりました。私でした。みんなを引っ張って行く力量もない私でしたのでビックリです。「コツコツと努力する姿と公平さ、温厚さが君にはあるから」これが理由であったように記憶しております。

正直、私は、リーダーとしての積極性に乏しく、特に女性に話しかけるのが大の苦手でした。しかし、様々な長期合宿や日々の練習において、女子部員とも話し合いがあり、女子に対して指示や司会、または仲介を要する場面などが必然的にあり、しだいに女性にもズケズケと話しかける自分になっていました。女子の下宿部屋を借りた飲み会では、酔っ払って階段から転げ落ち、壁にへこみ傷を作ったのが自分とは気づかず、後日、私が「誰

だ。こんな傷をつけたのは？」と聞くと、部員から「館先輩ですよ。」と言われ、穴があつたら入りたい気持ちでした。部屋主の女子部員には申し訳ない気持ちでいっぱいでした。「人間の性格は自分を取り巻く環境で変えることが出来るし、変えなければならぬ時が来る」このことを学びました。

後に、小学校教員になってから六年生を担当した時、教師に対しても物おじせず話す気の強い女子児童と、他の女子児童と言ひ争ひがありました。私が間に入つて指導していると気の強い女子児童が強い口調で「先生、人間の性格は変わらないんです。だから先生の言うことを聞くことは無理です。」と反発してきました。そこで私は「性格は変わるし、変えなければならぬ時は、自分が努力すれば必ず変えられる。脱皮出来ないザリガニは死ぬ」と言つて指導したことがありました。これは、私が大学時代に音楽研究会で実践していた経験から、確信を持つて言えたことでした。

最後の思い出は、三年生の時、初等教育専攻の卒業研究で選択した「独唱」での経験です。

講師の先生は、プロの独唱家・奥田良三先生であり、



第2回初等教育音楽会
(『文学部卒業アルバム』1976年3月)

また、ピアノ伴奏はNHKでも活躍された神辺八重子先生でした。

高校時代に「男声四部合唱団」を続けてきた私は、常日頃から自分の声に自信があり、当然、自分が一番だと思いついていました。そのようなある時、授業の課題曲で「Son Tutta Duolo（私は悩みに満ちて）」という曲を頭声発声と感情を込めて歌い、自分はやっぱり一番上手く歌えたと有頂天になっていたところ、奥田良三先生が言った言葉に、身が凍りつきました。

それは「君は確かに声は良いが、しかしうぬぼれて努力を怠っている。正確に楽譜を読み取った歌唱をしていない。これからは謙虚に自分を更に磨くと本当に素晴らしい独唱家になるよ」という言葉でした。

この奥田先生の一言は、教職に就いてからも私の生き方の指針となりました。今の自分に満足するのではなく、自惚れることなく、常に自己を厳しく見つめ、努力を怠れずに、毎時間どんな時にもベストを尽くしていくことを教えていただいた貴重な指導でした。この言葉は今も、今後も忘れずに大切にしていきたいと思います。

おわりにかえて

国士舘大学での学生時代を振り返ると、常に私の周りには、大学の素晴らしい先生方や職員の方皆さん、四年間、経済的に支えてくれた両親、そして心優しい先輩と級友が寄り添ってくれました。北海道から上京した私は、一人ぼっちではありませんでした。

私にとって国士舘大学での四年間は、その後の社会の荒波を乗り越えて行く「術」と「気魄」を養うことができた貴重な時間でした。

最後に、思い出深い学生生活を過ごさせてくれた国士舘大学に感謝すると共に、益々の発展を心より祈念申し上げます。